ベストクラス選定理由書

作成者：樽井翔一、角至真緒、中村あすか、出口和貴、須田康之、内海友加利、梅本優菜

科目名称　：　教えと学びの哲学（昼間クラス） （担当教員名　：　大関　達也）	
課　　程　：　大学院（修士）	開講時期　：　後期
授業形態　：　講義・演習	授業規模　：　30 人以下
インタビュー対象教員名　：　大関　達也 （実施日時　：　令和４年８月９日（火）20:00～21:00　；　実施場所　：　Zoom により開催）	
インタビュー対象受講者名　：　上阪　浩一、中原　竜彦、名田　文子 （実施日時　：　令和４年８月９日（火）20:00～21:00　；　実施場所　：　Zoom により開催）	

選定理由

◎今回授業するにあたって授業の意図はどのようなことが想定されていたのか

「受講生と共に考えに値する問いを投げかけてそれに授業の中で少しでもその答えに近づいていこうとする。しかし最終的には受講生一人ひとりが自分で考えなくてはならない問いとして開かれた形で終わるということを心がけて授業を行っていた。授業の趣旨としては教えることと学ぶことの意味を根本的に問い直し、そこからより良い教育について考え、近代教育思想につなげることである。」と述べられた。

◎授業に関しての今後の課題

「超越的なものや宗教に対して教育がどのように関わればよいのか？」

非常に扱い辛い問題など例えば宗教などについて触れてこなかった。教育は政治的な権力や宗教的な権力や団体に対して中立でなくてはならないが、実際には学校教育の中には宗教的な理由で活動に制限が出てしまうことがある。(Ex:キリスト教徒は日曜に授業に出られない、出席が認められない、単位が認められないことが裁判になったこともある。)公教育の問題を考える際において宗教は重要なことではあるが触れにくく曖昧にされている問題、議論を深めるべきだったのかもしれない。今回の授業では立ち入ることができなかったので今後の課題になるだろうと考えている。

【選定理由】

担当教員が授業に必要な情報や資料を用意周到で臨んでいたことが評価の点にあった。

今回は授業内でコロナ禍について何が起こっているのか、またコロナ禍で起こっていることが教育にどのような影響や問題を及ぼしているのかを考えることが授業内での議題であった。そのため、担当教員自らが膨大な情報収集を行なっており、授業外においてさまざまな新聞記事を読み多くの情報を整理し、自らも考えながら必要資材を準備しており、授業に対する熱意の高さが見受けられたことが評価の点であった。また、そのほかにも授業内での工夫点において、担当教員が受講生に質問を投げかけて議論の場を作り、長い沈黙があっても受講者から発言が出るまで待ちその沈黙が破られ議論が活発になることを意識していたと述べられ、その授業形態に関して受講者の授業アンケートのコメントに「学生が自ら考えたくなるような問いかけ」、「根本的な『そもそも』のところを揺さぶられる」など、学生が主体的に考えを深められたことが窺え、受講者からの高い評価を得ていたことからもベストクラス候補への評価に繋がった。